

目次

プロローグ <small>きょうかいせん</small> 境界線
8
第一章 自由の国
22
第二章 平等の国
62
第三章 カクメイ
90
第四章 理想の国
114
エピローグ <small>えいえん</small> 永遠の物語
142
少し大人になった君へ ～「自由」と「平等」について考えるためのヒント～
146
小説をより楽しみたい人のために ～隠された秘密～
164

装丁／三村恭子

装画・挿絵／君野可代子

空は一つ
太陽と月
迷いし者が
さかさまにして
重なりし時
永久に輝く

(理想の国の民謡より)



主な登場人物

 ペル

自由の国の少女。好奇心旺盛な15歳のおてんば娘。

 クウ

平等の国の少女。おとなしくて本の大好きな15歳。

 ジェイ

自由の国の賢者。年齢は分からない。

 マー

クウの祖母。

 レン

自由の国の少年。

 ロス

クウの飼い猫。人間の言葉がわかる特別な猫。

プロローグ 境界線

日が落ちかけたころ、小さな焚火の火が顔を照らすなか、子どもたちはいつものように一人の老人を囲んで話を聞いています。じっとして、少しも動かずに。

子どもたちは皆、村の長老の話を聞くのが大好き。長老が古びた本を片手に不思議な話をしてくれる時は、夕食の途中でも飛び出してくる子どもたちがいるくらいです。

集まった子どもたち一人ひとりの顔を微笑ましく見つめながら、長老が静かに語りかけます。

「みんなはこの理想の国がどうやってできたか、知っているかな？」

首をかしげる子どもたち。

「そうか。じゃあ今日はその話を読んであげよう」

そう言って長老は、一冊の古びた本を取り出しました。

「みんなが生まれるより前の、ずっとずっと昔の話だ……」



そこは二つの国のはずれ。美しい草原がどこまでも広がる一方で、暴力的なまでの冷たくて高い鉄の壁が世界を真つ二つに別っています。まるで地球を包丁で二つに切ろうとして、そのまま時間が止まってしまったかのように……。

その昔、この世界には、自由の国と平等の国という、隣り合う二つの国がありました。自由の国は、自由こそが幸福だと信じ、自由のみを追求していました。平等の国は、平等こそが幸福だと信じ、平等のみを追求していました。

二つの国は互いに影響を与えられることを恐れ、鉄の壁で境界線を設けて、行き来できないうようにしていたのです。

自由の国の人たちは、皆自由を愛していました。だから平等なんてことにはまったく興味がなかったのです。お店で「一人につき一個です」などと言われると、自由の国の人たちは「法律違反だ！」と怒り出す始末。ところが、ベルという少女だけは好奇心

旺盛で、平等の国に興味を持っていました。彼女はなんでも知っている賢者ジェイおじいさんのところに足しげく通い、よく平等の国の話を聞いていたのです。なにしろ平等の国の話は、ほかの誰も知らなかったのですから。

他方、平等の国の人たちは、平等が大好き。自由なんて苦しみを生むだけだと信じ込んでいました。お店で「ご自由にお取りください」などと書いてあったら、それこそ平等法違反で訴えられるくらいです。それほど厳しく平等が徹底されていたのです。つまり自由を求める自由もなかったのです。だからこの国には、自由に興味を持つ人なんて一人もいませんでした。

平等の国の少女クウもそんな一人です。自由の国にはなんの関心もないおとなしい性格で、祖母マー、そして飼い猫のロスと一緒に静かに暮らしていました。ただ、彼女は犬の好きでした。本だけじゃなくて、何かに文字が書いてあるのを見つけると、食い入るように読んでしまう習慣があったのです。

ある日のことです。ジェイから平等の国のお祭りがあると聞き、好奇心旺盛な自由の国の少女ベルは、境界線からこっそり覗きたくて仕方なくなりました。普通この国で

は、平等の国のお祭りになど誰も興味がありません。それに境界線からお祭りの様子が見えるかどうかもわかりません。でも、ベルは、一度やりたいたいと思ったら、もう自分を止めることができませんでした。そういう性格なのです。

ベルにはちよつとした武勇伝があります。小さいころ、九十三メートルもある自由の塔のてっぺんに上りたいと言って聞かず、周囲が止めるのも構わずに、こっそり家を抜け出したのです。そして見事上りきったことがあります。この塔は歴史的建造物で、木でできた古いはしごしかついておらず、誰もが上るのを怖がっていました。それを幼い少女が上りきったことで、町中の噂になったのです。

そのベルが境界線に向かった同じ日、平等の国のクウは、飼い猫のロスとお祭りに来ていました。食べ物を売るお店、帽子を売るお店、おもちゃを売るお店、広場にはたくさんのお店が出ていましたが、どのお店の前にもきちんと人々が並び、ゆったりと時間を過ごしていました。

平等の国では休日やお昼休みによく見られるのどかな風景です。あくせく働く人や、イライラしている人、順番を守らない人は一人もいません。クウは、人々のそんな落ち

着いた姿を見ると、ほっとするのでした。

広場の中心では、陽気なギターと笛の演奏に合わせて、大道芸をやっていました。派手な色のぶかぶかの服を着て、赤い鼻をつけたおじさんが、器用に球の上に乗っかって踊っています。時折わざとこけて人々を笑わせるのです。クウもすっかり見入ってしまいました。

「面白いね、ロス」

クウが足元にいる飼猫のロスにそう話しかけました。ところが、ロスが見当たりません。全身真っ白な毛をした猫ですから、雪の中でもない限りはすぐに目につくはずですが。

「ロス、ロス。どこにいるの？」

あたりを見渡しながら何度も呼びかけたのですが、一向に出てきません。いつもならひよこつと顔を出すはずなのですが……。どうやら大道芸に夢中になっている間に、ロスが迷子になってしまったようです。

クウは慌ててロスを捜しました。しばらく広場を捜していると、ロスらしき猫の後ろ姿が、森へと続く道のほうに走っていくのが見えたような気がしました。まさかと思い

ましたが、仕方ないので、クウも森のほうへと歩いていきました。

三十分は歩いたでしょうか。気づけば森を抜け、境界線付近にまで来ていました。普段は誰も近寄らない場所です。ロスの名前を呼びながらクウが不安げに歩いていると、境界線の高い壁の向こう側から人の声が聞こえてきました！ 自由の国の誰かがすぐそばにいるようです。

自由の国の人には会ったことがなかったのですが、クウは一瞬心臓が止まりそうになりました。よく耳をすますと、女性の歌声のようです。しかも、なんと自分もよく知っている平等の国の民謡ではないですか！

壁の向こう側で歌を歌っていたのは、そ



う、ベルでした。ベルは二つの国を遮る鉄の壁の隙間を捜すために、鼻歌を歌いながら歩いていたので。もちろん彼女が歌っていたのは、自由の国の歌であって、平等の国の歌ではありません。でも、なぜかそれは平等の国の民謡とまったく同じだったので。

クウは思わずその歌を口ずさんでしまいました。平等の国では、子どものころからしょっちゅうその歌を歌う習慣があったからです。

クウの歌声を聞いてベルもハツとします。壁の向こう側に誰かいる。当然それは平等の国の人間で、しかも自分と同じ歌を歌っている。バクバクする鼓動を抑えつつ、ベルは歌い続けました。何か未知のものにつながっている糸をおそろおそろたぐるように。クウもまた、聞こえる声のほうに向かって歌い続けます。まるで誰かに体を操られているみたいに、歌を止めることができなかつたのです。そしておそらく壁のちょうど裏側に二人が立ったところで、二人は壁越しに向き合いました。

空は一つ

太陽と月

迷いし者が

さかさまにして

重なりし時

永久に輝く

空は一つ

太陽と月

迷いし者が

さかさまにして

重なりし時

永久に輝く

素敵なメロディーに乗せたこの美しい詩が、あたりに響き渡りました。しかも、ベルの歌うサビのメロディーと、クウの歌うサビのメロディーは少し違っていて、うまくハーモニーになっているのです。

その瞬間です。まったく不思議なことが起きました。二人の目の前の壁に、穴が開き始めたのです。まるでアイスクリームが溶けるように、壁はみるみる溶け出して、ちやうど子どもが一人通れるくらいサイズのになりました。穴は二人の腰の高さくらいでした。穴の向こうには人のお腹のあたりが見えています。

「あんた平等の国の人？」

ベルが最初に口を開きました。

「そ、そうよ。あなたは……」

戸惑いがちにクウが答えると、ベルは穴の部分からひよいと顔を覗かせました。

「わあ！」

びっくりするクウ。

「わあ！」

ベルも驚きます。二人が驚いたのは、無理ありません。なんと、二人の顔はまるで双子のようにそっくりだったのです。黒い澄んだ瞳に、整った鼻、小さな唇。黒いまっすぐな髪まで同じでした。違いといえば、髪型と服くらいです。ベルはポニーテールにワンピース、クウは三つ編みのおさげに作業着風のワンピース。どうやら背丈も同じく

らしいようです。

「あんたいくつなの？」

ベルは穴をくぐって、平等の国に入ってきました。そして、そっくりな相手をじろじろと確認した後、そう尋ねました。

「……十五歳」

クウが小さな声で答えます。

「へー、一緒じゃない。私はベル」

「私はクウ」

その時クウの足もとで、ミャオと猫の鳴き声がありました。

「ロス？」

ロスのほうがクウを見つけてくれたようです。

「もう、どこ行ってたの？ すぐく捜したんだから」

泣きそうな顔になっているクウの頬を、ロスは申し訳なさそうに一舐めました。

「そうか、あんた猫を捜してたんだ」

「今日はお祭りの日で、いつの間にか迷子になっちゃって。あなたは？」

「私はその平等の国のお祭りが見たくて、覗けるところを捜してたの」

「それは無理よ。だって町はここから森を抜けたところにあるんだもの」

「そうなんだ……」

ベルは少し残念そうな表情を浮かべていましたが、突然思いついたようにこう切り出しました。

「ねえ、少しだけ入れ替わらない？」

あまりの唐突で、大胆な提案に、クゥは言葉を失いました。

「だから、たまたま見かけがそっくりなあなたと私が入れ替わるわけ。それで、お互いの国を見てみるの。私、前から平等の国にすっごく興味があったんだ」

それを聞いて、ようやく提案内容を理解したクゥは、困った表情を浮かべます。

「そんなの危険だわ。私は別に自由の国に興味なんてないもの……」

「ずっとじゃないわ。そうね……三日間だけ。今日はもうお昼だし、明後日は夜明け前にここに来るってことで、実質明日の一日だけじゃない。大丈夫だって。お願い！」

あなたのところも今学校は夏休みでしょ？」

手を合わせて頼み込むベルに、クゥは押されてしまいます。



「ほ、本当に明後日の夜明け前に来てくれる？」

「当たり前じゃない。でないと私も困るわよ」

「ロスは連れていってもいい？」

「もちろん！」

「絶対明後日の朝までよ」

クウはついに折れました。

ロスはワクワクした表情を浮かべて、待ちきれない様子でクウの腕から飛び降りました。あたかもすべてがわかっているかのように。

そうして二人は、念のために服装を取り換え、地図を描いて住所を教え合い、別の国へと入って行くことになったのです。クウの話によると、平等の国では皆同じ色の国民服を着ているということです。ページュの地味な作業着のような服です。そこで目立たないように、服を取り換えることにしたのです。ベルはクウが見たこともないようなピンクのワンピースを着ていましたから。もちろん自由の国には服の決まりなんてありません。みんな好き勝手な服を着ています。

「ねえ、クウ。あんたはまず、ジェイっていうおじいさんを訪ねればいいわ。真っ白な長い髪に長い髭。すぐにわかるわ。町の賢者だから彼ならうまくあなたを助けてくれるはず」

「ジェイおじいさんね。あなたはまず私のうちに行って事情を説明して。おばあちゃんと二人暮らしたから、心配するといけないし」

「わかった」

ベルはウイंकをして、森のほうへと駆けていきました。クウも仕方ないので、ロスと一緒に穴をくぐり、一目散に森を抜け、自由の国の町に向かって走り出しました。

ちようど正午。鉄の壁の真上に太陽が昇り、ガラガラと二つの世界を半分ずつ照らしていました。まるで何か大きな事件の始まりを告げるかのように……。

少し大人になった君へ 、「自由」と「平等」について考えるためのヒント

再びこの本を開いている君は、いま何歳ぐらいだろう。ベルやクゥと同じ十五歳ぐらいだろうか。それとも高校生？ あるいは、社会に出ていろんな矛盾に突き当たり、初めて「自由」と「平等」について考えてみたくなったのだろうか。

歴史を学んだ君は、「自由と平等だったら、自由が勝つってもう歴史が証明しているじゃないか」と思っているかもしれないね。たしかに、アメリカを中心とする資本主義諸国と、ソ連を中心とする社会主義諸国が対立した冷戦は、二十世紀の末、ソ連の崩壊によって終わった。でも、それは本当に「自由」の勝利だったのだろうか。

この本を書いている二〇一四年、日本はどちらかといえば自由の国だ。アメリカ、中国に次いで、世界第三位の経済力を誇っている。ただその一方で、日本の相対的貧困率は世界第二位。日本の子どもの六人に一人が貧困で、シングルマザーに至っては約七割が年間就労収入二百万円未

満というデータもある。まさに自由の国の矛盾と言ってもいいだろう。

いま、フランスの経済学者、トマ・ピケティの『二十一世紀の資本論』（現時点では未邦訳）が英訳され、欧米で話題になっている。タイトルからして、社会主義のバイブルであるマルクスの『資本論』を彷彿させる本だ。彼は、過去三世紀にわたる膨大なデータに基づいて、資本主義にとって富の集中、つまり格差の拡大は必然であることを説く。もちろん日本も例外ではない。そのうえでピケティは、世界的規模で富裕層の資産に重税を課すことを提案する。

これではまるで平等の国を理想にしているようにも見えるが、はたしてこの提案で自由の国の矛盾は解消されるのだろうか？ 人々のやる気を削ぐ結果にはならないだろうか？ 自由にかつ平等に生きるための理想の方法はあるのか？ いま一度、僕と一緒に自由と平等の意味について考えてみよう。

自由の意味

そもそも、「自由」という概念はどこから来たんだろうか。こういう抽象的な概念のほとんどは古代ギリシアで生まれている。なにしろ抽象的な言葉について深く考える哲学という営みが始まったのは古代ギリシアだからね。哲学の父ソクラテスがそれを始めたと言われている。

そんな古代ギリシアでは、自由は奴隷状態にないことを意味したんだ。古代ギリシアの都市国家ポリスには、自由人と奴隷がいて、自由人が奴隷を使って生活していた。だから奴隷状態にないこと、つまり、誰にも支配されていないことこそが自由だった。

中世になると、封建制によって、支配する集団と支配される集団に分かれてくる。だからそこでも支配されていない状態が自由を意味していたと言える。つまり、干渉されないことが自由のもともとの意味だったと言っているだろう。

近代になると国家が誕生し、干渉をする主体が国家権力になる。そして必然的に、自由はその国家権力の排除を意味するようになるんだ。この国家権力からの自由を唱える思想は、古典的自由主義と呼ばれる。十七世紀イギリスの思想家ジョン・ロックが、生命・自由・財産のように人が生まれながらにして有している自然権に由来する諸権利を、権力の恣意的な行使から守るべきだと主張したのが始まりだ。

それをもっともわかりやすい形で表現したのは、十九世紀イギリスの思想家J・S・ミルの『自由論』だといえる。ミルはこの古典的自由主義の内容を、他人に危害を加えない限り自由は保障されるという「危害原理」（あるいは「自由原理」）として打ち出した。

でも、国家権力を完全に否定するわけにはいかない。どうしてだかわかるかな？ いくら自由が大事でも、国家権力がなければ、国はめちゃくちゃになってしまうからね。人間がみんな神様

のように善人で、何があっても決して怒ったりせず、常に他者の利益を優先するならば話は別だろうけれど、残念ながらそれは望めない。いくら善人でも、自分の家族の命を守るためなら、ルールを破ることだってありうる。そんな時、中立な立場で共同体の秩序を取り締まる国家権力がないとすると、人々は互いに争い合うことになるんだ。

イギリスの思想家トマス・ホブズは、この状態を「万人の万人に対する闘争」と表現した。それが人間にとっての「自然状態」なのだ。実際、大災害が起って物が不足し、統治機能が一時的に麻痺すると、暴動が起ったりするのはその証拠だ。そこで思想家たちは、そんな国家権力による支配と、個人の自由の関係を矛盾なく説明することに腐心する。その解決策の一つが社会契約説と呼ばれる思想だった。

社会契約説というのは、簡単に言うと、自由な個人が契約によって、自らの意思で社会をつくり、国家権力に伏するという理論だ。たとえば、ホブズもその論者の一人で、人民が自らの権利を王に譲渡し、契約によって国家に服従すると言う。これではまるで国家に自由を奪われてしまふかのように聞こえるけれど、そうじゃない。たとえば、フランスの思想家ジャン・ジャック・ルソーが書いた『社会契約論』によると、自分の決めたルールに服する限り人は自由だということになるんだ。たしかに理屈は通ってるよね。この本が、自由を求めるフランス革命のバイブルにもなったのはうなずけると思う。

あるいはドイツの偉大な哲学者G・W・F・ヘーゲルは、もっと積極的に自由と国家の関係を位置づけようとした。「国家は具体的自由の現実性」と唱えて、国家が自由を実現するというユニークな発想をしたんだ。本当にそんなことができれば見事に矛盾を解決したことになる。でも、一步間違えば国家主義を肯定することにもなってしまう。だって、個人の自由は国家次第だというんだから。ヘーゲルの思想はいまだに評価が分かれるところだ。

いずれにしても、こうして近代ヨーロッパでは次第に自由の国が形成されていった。その極致が十九世紀後半にもたらされたイギリス発の産業革命だろう。人々は自由に働き、自由にお金を手にするようになっていったんだ。ところが、産業革命には負の側面もあった。つまり、人々の間の貧富の差を大きく広げてしまったという問題。そこで、後で紹介する社会主義思想が登場してくるんだけど、自由主義思想の中からもこの問題に対応しようとする考えが出てきた。それが新自由主義（ニュー・リベリズム）だ。

イギリスの理想主義を代表する哲学者T・H・グリーンやL・T・ホブハウス、経済学者のJ・A・ホブソンといった思想家たちが主となって、むしろ国家が個人の自由実現のために積極的に介入すべきだという主張を展開し始めた。言ってみれば、古典的自由主義が「国家からの自由」を意味する消極的自由だったのに対して、「国家への自由」を意味する積極的自由が唱えられたわけ。今でいう福祉国家の走りだね。二十世紀のヨーロッパでは、こうした福祉国家的な思

想が拡大していった。

それにつれて、アメリカでもジョン・ロールズの名著『正義論』に代表されるように、自由の追求に社会福祉や公正という視点が加えられるようになる。日本では古典的自由主義と区別して、カタカナのまま「リベリズム」と呼ばれている福祉主義的な自由主義のことだ。

一九七〇年代後半になると、先進資本主義国は財政危機に陥り、福祉国家的な発想は批判にさらされるようになる。その急先鋒が、オーストリア生まれの経済学者F・A・ハイエクをはじめとするネオ・リベリズムあるいはリバタリアニズム（自由至上主義）だった。ちなみに、ネオ・リベリズムも日本語だと新自由主義と訳されるんだけど、さっきのイギリスの福祉国家的な新自由主義（ニュー・リベリズム）とはまったく別物。ややこしいからここではリバタリアニズムと呼んでおこう。

たとえば、ハイエクは国家の介入を批判し、市場の役割を最大限重視したことで有名だ。またアメリカの哲学者ロバート・ノージックは、所得の再分配は自己所有権の侵害であるとまで言っていて、防衛、治安維持、司法の三つの機能だけに限定した最小国家論を唱えている。

あるいは、アメリカの経済学者デヴィッド・フリードマンは、「人々は、彼らが望むように暮らすことを許されるべきである」というように、生活における完全な個人主義の実現こそがリバタリアニズムの思想の根幹にあると主張する。そのためには、個人の財産権と自身の身体に対す

る所有権を絶対的なものと考え、政府の干渉をできる限り排除しなければならなくなる。

自由を求めて建国されたアメリカには、リバタリアニズムを標榜する人たちがたくさんいて、実際に税金を取られることに猛反対している。そういう人たちは民主党ではなく、共和党を支持する傾向にある。国の半分くらいの人々が共和党を支持してるので、アメリカはやはり自由の国、個人主義の国だと言っているだろう。

共和党支持者は、総じて銃の所持を禁止することに反対したり、医療保険制度に反対したりする。これは銃の禁止や医療保険制度が当たり前の日本人には理解しにくいかもしれない。でも個人の身体や財産が絶対的なもので、一番大事だとすると、自分でそれを守るための権利として銃の所持は認められるべきということになるんだ。医療保険については、強制的に保険料の徴収が行われる場合、個人の財産権が侵害されるという視点から反対するわけ。いわば、自由を守るために、こうした主張をしているんだと言える。

これに対してヨーロッパは、アメリカと比べると後で紹介する社会民主主義、つまり自由に歯止めをかける思想の影響力が強いと言える。もちろん国によって背景は異なるわけだけど、たぶんそれは、歴史的に行き過ぎた自由の主張の反省がきちんとなされているからだろう。自由を求めて集まった人たちがつくった歴史の浅い国アメリカが、自由の国の典型のように見えるのはそ

のせいかもしれない。ということは、アメリカもやがて変わっていくんだろうか……。少なくとも僕はそう願っている。

平等の意味

じゃあ、「平等」という概念はどこから出てきたんだろう？ 自由についての説明で紹介したように、古代ギリシアには奴隷がいたから、まだ平等という発想はなかったと言っている。その後、アレクサンダー大王の遠征によって古代ギリシアの都市国家が崩壊し、ヘレニズム時代が訪れる。そうしたより普遍的な社会が誕生してはじめて、平等という概念が出てきたんだ。

ヘレニズム時代のストア派が平等を唱えている。たとえば、セネカという思想家は、自然を等分にして享受する人々がより幸福であるとして、自然法の前における平等を説いた。つまり、物でも人の権利でも、世の中に存在するものはなんでも平等に分け合うことではじめて幸せになれるということだ。その後の中世の時代には、神の前の平等が当然のものとされていたんだけど、近代になると次第に人間の平等が主張され始める。

最初に明確に主張されたのは、一七七六年アメリカのヴァージニア権利章典における「すべての人は生まれながらに平等、自由そして独立である」という宣言だ。この思想はそのままフラン